

# ゲンよ中東へ届け

## アラビア語に翻訳・出版

【カイロ】中村恒一郎「原爆投下の悲惨さを伝える漫画『はだしのゲン』第一巻のアラビア語版が出版され、記念の催しが二十三日、エジプトの首都カイロで開かれた。翻訳したカイロ大日本語学教授のマーヒル・シリビーニーさん(中東)は「日本のように平和が実現できれば、(中東の)経済発展も可能になる。平和の大切さを学んでほしい」と訴えた。

シリビーニーさんは、二三年前に立案した。第一巻車の不安定化が強まるなかの「アラビア語版は独立行政法人「国際交流基金」の支援を受けて、エジプトの出版社から昨年十一月に千部を発送した。『はだしのゲン』は全十巻。現在は千カ国語以上で翻訳されている。シリビーニーさんは一九八七年から五年間、広島大大学院に在籍。翻訳は二〇一〇年、中東各国では、日本の印象

原爆投下後の広島で生きる少年を描いた『はだしのゲン』は、二〇一二年に亡くなった漫画家中原啓治さん(享年七十三)の自らの体験が基になっている。主人公の少年ゲンがたくましく成長する姿を描いた作品は平和教材として活用され、国内ではドラマやアニメ映画、実写映画も作られている。

### 金沢「ひろめる会」

一方、原爆の悲惨さを描いた描写などが過激だと見て、三年には松江市教育委員会が市内の小中学校に対して、学校図書館で子

## 平和の大切さ感じて

どもの閲覧を制限するよう要請。全国で議論を呼んだ末、市教委が要請を撤回する騒動があった。

この問題を機に昨夏、埼玉東松山市の「原爆の図丸木美術館」は、絵本版のカラー原画や十五カ国語に翻訳された作品を展示する特別展を開いた。中沢さんが何を伝えたかったのか、あらためて作品を見てもらうことと考えたという。

たどると、学会員の岡村幸宣さん(同)は「海外で新たに紹介される意味を日本人も広い視野で考える必要がある」と話した。

「はだしのゲン」をひろめる会(金沢市)の浅妻南海江理事長(同)は「世界にはアラビア語を母語とする人が非常に多く、念願がなかった。なるべく若い人にゲンの体験を知ってもらい、平和の大切さを感じてほしい」と募んだ。



を原爆と重ねるアラブ人がトでは「日本をいって思い浮かぶのは何？」との問いに、七人が「広島、長崎」ト人百人への簡易アンケートと答えている。

23日、エジプト・カイロで「はだしのゲン」の翻訳出版について講演するカイロ大のシリビーニー教授。手前右はアラビア語版(共同)